

刊行にあたって

歯科疾患実態調査の結果が示すように、超高齢社会を迎えたわが国において、全部床義歯、部分床義歯を必要とする患者はいまだ減少していないことは明白である。さらに、義歯装着者において治療難易度が増していると感じる読者も多いことと推測する。義歯の難症例への対応方法はあるものの、一方では限界があることも事実である。

そのような場合、必要最小限のインプラントを用いたインプラントオーバーデンチャー(IOD)、インプラント部分床義歯(IARPD)が有効である。すでに多くの成書においてその有効性は示されているものの、術前診査から経過観察に至るまでの基本的な考え方や手技について、IOD、IARPDの両方を網羅している成書は非常に少ない。

このような背景から、2019年に「インプラントオーバーデンチャー ファーストステップ」を、2021年に「IARPD ファーストステップ」を月刊デンタルダイヤモンドで連載した。連載中は読者の皆様よりうれしいお言葉を多数いただき感謝している。連載当時は、代表的な下顎IOD、IARPD症例をターゲットに解説したが、現在はIOD、IARPDを上顎に適用している読者も多いであろう。また、あれから数年が経過して、IOD、IARPDとともに臨床術式の変化も少なからず生じていると感じている。

そこで、このたび連載の内容に、①上顎IOD、IARPD、②超高齢社会に向けたインプラント治療のあり方、③デジタルソリューションを活用したインプラント義歯、という3つの新項目を加え、発刊させていただき運びとなった。読者諸兄の臨床においていま一度、義歯の難症例におけるIOD、IARPDの適応を検討していただければ幸いである。

兒玉直紀